

『経営に役立つヒント』

令和七年六月一日

第二百六十五号

五月十日十一日と、樋口季一郎の生誕地である淡路島を尋ねました。令和四年に「伊弉諾神宮」に軍服姿の樋口中将の銅像が建てられました。神宮に軍服姿の銅像が建てられるのは極めて稀なことです。

昭和二十年八月十八日、「日ソ中立条約」を破ったスターリンのソ連は千島列島にも侵攻し出しました。ポツダム宣言受諾後のことです。

ソ連軍は八月十八日未明、千島列島最北端の占守島（しゅむしゅとう）へ押し寄せました。樋口は占守島の守備隊に「断乎、反撃に転じ、上陸軍を粉碎せよ」この戦いは「自衛戦争」であると徹底抗戦を命じたのです。

日本軍優勢のまま、二十一日に停戦が成立、二十八日に米軍が北海道に進駐。

当初スターリンは占守島を一日で制圧し、北海道の北半分を占領する積りでしたが、その計画が瓦解しました。

戦後、ソ連は樋口に対して「戦犯引き渡し」を米国に要求しますが、遡る昭和十三年三月「オトポール事件」で救出したユダヤ人たちが、樋口の窮地を救いました。

北海道を守った軍人、陸軍中将樋口季一郎の功績を忘れてはなりません。

更に、栗林忠道陸軍大将は、昭和二十年三月、硫黄島において物量で圧倒する米軍に対して、一か月以上戦い続け、米軍は当初五日間で全滅させる予定の作戦計画を大きく狂わせました。日本を守った立派な軍人でした。硫黄島には、今も一万柱以上の遺骨が未回収のままです。これではいけません。

もう一人、大田實陸軍中将は、昭和二十年六月六日、「・・・沖縄県民斯く戦えり。県民に対して後世特別の御高配を賜らんことを」と打電し、大田中将の部隊は六月十三日に全滅しました。

戦後、心無い左翼や沖縄のマスコミが、日本は沖縄を見捨てたと言いますが、戦艦大和の出撃も、特攻隊の出撃も、沖縄を見捨てなかった証拠であるといえます。

正しい歴史を学び、現地を尋ね、誇りを取り戻しましょう。

我々中小企業の社長が、こういう立派な生き方をしていくこと、「国土」と言える高い志を持って、日々の仕事に当たる事が大切だと思います。

森信三先生が、こう述べておられます。

『田を耕すにも、単に一日の仕事として耕すか、一家を憂いて耕すか、はたまた一国を念頭において耕すかによって、そこに描かれる波紋にも小大無量の差を生ずべし。しかもその現れたる処は、畢竟みな田を耕すに過ぎず』

未来の日本を創るのも、滅亡させるのも、我々一人一人の社長の思い一つです。正々堂々と、自分の仕事に全力で邁進して参りましょう。

今月のポイント

日本を支えているのは

我々中小企業の社長です。

